

回路的世界を繋ぐ装置としての「移民宿」

——横浜／ホノルルを繋ぐ移動の経験の記憶——

藤原法子¹

Migrant's Hotel as a Device in a Circuit World

FUJIWARA, Noriko

要旨：本稿は、人びとの国境を越える移動を支えた施設の一つである移民宿を手がかりとして、移動の出発点である横浜と移動先であるホノルルとを繋いで形成される回路的世界の一端を描こうとするものである。明治期に始まり第二次世界大戦前まで続いた人びとの国境を越える移動を支えたのが移民宿である。横浜にはいくつもの移民宿がつくられ、移動先のホノルルにおいても同様に「日本人旅館」がつけられた。そして戦後は観光団を中心として移民宿と「日本人旅館」を利用して再び人びとの国境を越える移動が行われている。本稿では、これら二つの場所において移動を支える施設としての移民宿をめぐって展開した人びとの経験を、移動の経験の記憶とし、この移動の経験の記憶をとおして、人びとの場所との結びつき方やそうした人びとの生き方やアイデンティティを可能とする複数の世界が交差する場としての都市的世界＝回路的世界の一端を明らかにすることが目的である。

キーワード：移動の経験の記憶、移民宿、回路的世界

はじめに

横浜には日本から海外へと人びとが渡っていくようになった明治以降、多くの移民宿が集まっていた。それらの移民宿を組合員として、その構成は異なるが、戦前戦後をとおして「横浜外航旅館組合」がつけられている。この外航旅館というのが本稿で対象とするいわゆる移民宿と呼ばれていたものであり、外航汽船に乗って海外へ行く人びとや海外からやってきた人びとの乗船、出入国や荷物の手続きを行い、下船後のそして乗船までの当該地での滞在を世話したのである。この「横浜外航旅館組合」の事務所が置かれていたのが、大棧橋の入り口の交差点の一角にある貿易会館である（写真1）¹⁾。12の旅館や関連会社を組合員とした戦後の「横浜外航旅館組合」は海外へ／からの玄関の役割が横浜港から羽田へと変わっていく1971年頃まで存続していた²⁾。海外へ／からの玄関であった大棧橋に続く通り、大棧橋と桜木町を結ぶ海岸通やその近辺には、「横浜外航旅館組合」の事務所をはじめ、移民宿や「スーベニア」、汽船会社、領事館、銀行、そして移民あっせん所など国境を越える人びとの移動に関わるさまざまな施設が点在していたのである（図1）。

現在、こうした施設はほとんどその姿を消してしまっ

ているのだが、ここを舞台に展開した移動をめぐる出来事は風化してしまっているのだろうか。

本稿は、人びとの横浜における移動の経験の記憶と移動先のホノルルにおける移動の経験の記憶の繋がりと重なりをとおして、移動をとおして見えてくる「回路的世界」の一端を浮かび上がらせようとするものである。まず、第1節では人びとの移動の経験の記憶の場所としての、特に移民宿を手がかりとして見えてくる横浜について見ていく。第2節では日本からハワイへの人びとの移動の概要について述べ、第3節で移動の経験の記憶のもう一つの場所としての、「日本人旅館」を手がかりとし



貿易会館正面玄関（昭和30年頃）

写真1 横浜貿易会館の正面玄関

（社団法人横浜貿易協会、2005『創立100周年記念誌』123頁より抜粋。写真左側の「横浜貿易協会」の左のドアのところにアルファベットで上段に「YOKOHAMA PASSENGER SERVICE」、下段に「YOKOHAMA GAIKOU RYOKAN KUMIAI」と書かれている。）

受稿日2011年12月1日 受理日2011年12月16日

1 専修大学人間科学部社会学科 (Department of Sociology, Senshu University)

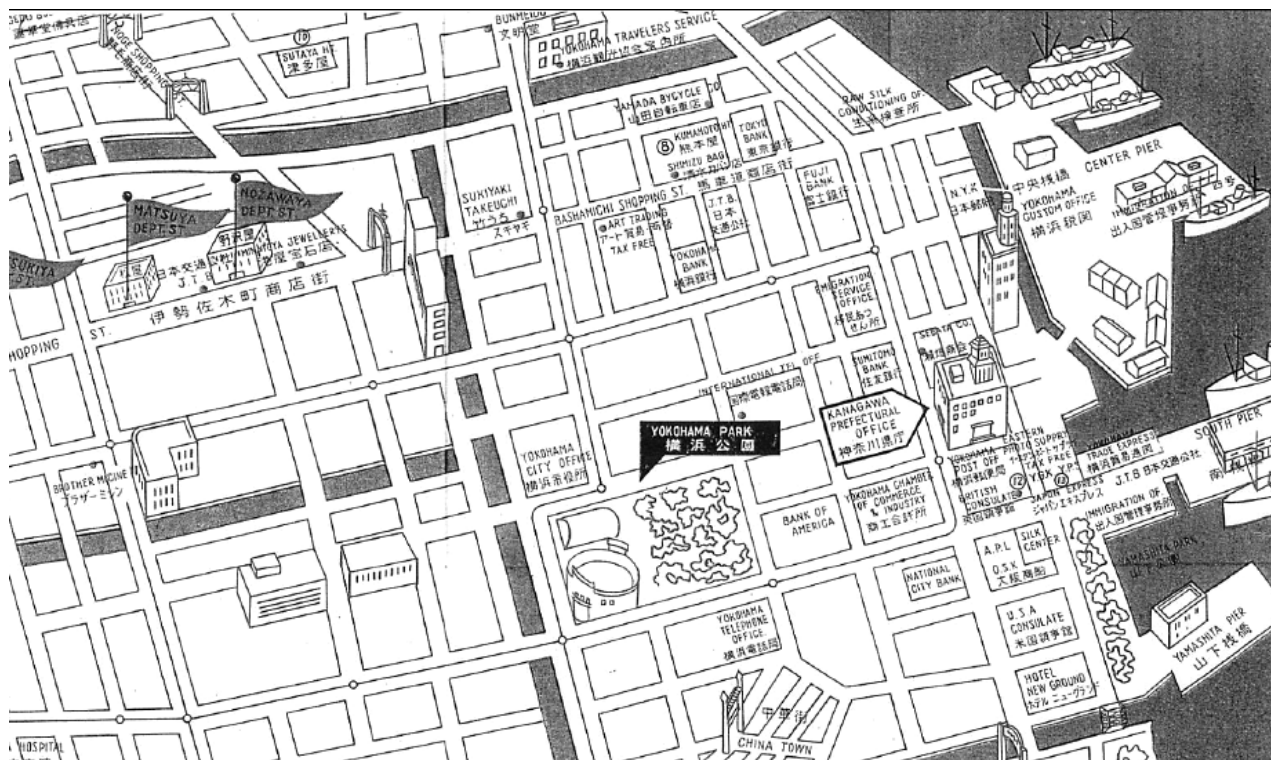


図1 1960年代の海外からの観光客向け横浜観光案内図
 (『横浜観光案内図』発行横浜外航旅館組合より抜粋。)

て見てくるホノルルについて見ていく。

1. 横浜の移動の経験の記憶

1-1 海外へ/からの玄関としての横浜

1958年4月1日、「K旅館」が戦前から営業していた場所に戻っての営業が再開された³⁾。再開にあわせて、3月中から「布哇タイムズ」や「布哇報知」、「羅府新報」「北米報知」といった北米・ハワイを中心とする日系新聞に「新館落成」の広告が掲載され、再開後には続々とハワイやシアトル、トロントなどから観光団が訪れている。1958年9月5日にハワイ・ホノルルからやってきた「吉永・米屋合同観光団」もその一つである(写真2,図2)⁴⁾。

この「K旅館」は横浜にあったいわゆる移民宿の一つである。そして戦後は特に日本から移民していった人びとによる日本への観光団の受け入れの役割を担っていく。

拙稿でも述べたが、この「K旅館」の経営者のご子息の一人F氏(67歳)は、観光団が次々と訪日していた頃について次のように語っている。

「当時は移民宿が中心だったから。旅券の申請から何から何まで、移民宿が現在のJTBのような仕事をして



写真2 熊本屋旅館観光団写真
 熊本屋旅館前にて「吉永・米屋合同観光団」1958年9月5日記念写真(F氏所蔵)

いた。うちも『海外旅行案内所』という看板も挙げてたし。観光団の人たちの国内観光の宿泊予約を取るために、JTBなんかもしょっちゅう出入りしてたし、観光団の人たちが落とす外貨の両替のために銀行さんも船が入ってくるたびに出入りしてた。ここ(移民宿)に送っておけば届けてくれるというので、海外からいろんなものが送られてきた。プロ野球のバットやグローブなどの道具が送られてきたこともあった。ここを利用した人から筋子や銀鮭がどっさり送られてきたこともある。」(F氏への聞き取りより⁵⁾)

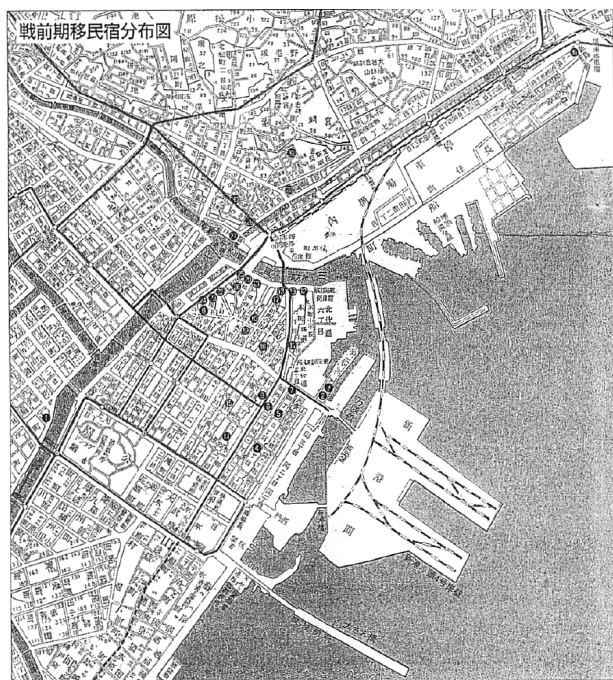


図2 戦前期移民宿分布図
(横浜マリタイムミュージアム、2004『企画展横浜港を彩った客船』39頁掲載のものを抜粋。この移民宿の分布は、戦前期に時期は異なるが横浜にあった確認できる移民宿について載せてあるものである。)

また観光団の人びとの入国手続きは、船の場合は、移民宿の人間が沖合まで出て行って行き、翌日の大荷物の税関検査にも立ち会って、下ろした荷を今度は横浜駅まで運び、国内各地への発送の手続きもしていたし、航空機の場合でも当時は碗章ひとつで検査場に入っていく手続きに立ち会ったりしていたとも述べている。

そして移民宿を中心とするこうした賑わいは、観光団を取り巻くほかの施設の人びとにも共有されている。その一つが「スーベニア」である。横浜港の大棧橋付近には、乗船客や船員相手の土産物屋がいくつも展開していた。シルクセンター内の店舗もそうした施設の一つである。観光団の人びとの写真を撮る写真店、日本の宝飾品を販売する店舗、日本の人形や陶器や磁器、焼き物、電気製品などを販売するさまざまな店が競って構えていたのである。シルクセンターの開業当時から出店しているS氏(宝飾店店主、79歳)は、当時の状況について次のように話している。

「アメリカやヨーロッパから来る観光客が相手で、最盛期は東京オリンピックの頃。大棧橋にはホテル代わりの船が停泊していたくらい賑わっていましたよ。シルクセンターも中1階地下とそれぞれの階が店舗で埋

まっていた、ここにお店を出すのに審査がありましたし。お客さんも多かったし、その頃は、一人で100万、200万という金額で買い物をする人も珍しくなかったですから。船から飛行機に代わってもしくは、バスで観光にきて買い物をしていたくれましたね。」(S氏への聞き取りより)

大棧橋への入り口付近で電器店を営むI氏(69歳)も、1950年代から60年代中頃までの賑わいについて同様に語っている。

「うちのような正規の免税品を扱っていたところは、海岸通や弁天通り、伊勢佐木町あわせて7、8軒くらい。そのほかに横浜艦船商工業協同組合という船に乗り込んで品物売る人たちの団体があって、そこに登録している人が当時は200人くらいいたんじゃないかな。時計や宝飾品、テーラーの人も。あとは本当に弁天通りとかシルクセンターとか海岸通とかにさまざまなスーベニアがあって。うちでは昭和35年頃父親の代に正規に両替商の認可を受けて、両替商もしてカメラやステレオ、ラジオなんかを販売していました。昔は銀行で両替なんかしなかったから、船から降りてうちでドルから日本円に換えていったり、船に乗る前に日本円からドルに換えていくとか。本当に多かったですよ。トランジスタラジオが有名になってくる時期でもあって、月々の売上げが今では考えられないくらいでしたからね。店の外までお客があふれてて、なんかどんぶり勘定で、品物渡してお金もらって、みたいなときもありましたしね。」(I氏への聞き取りより)

こうした横浜という場所に重ねられた記憶と経験を背景に、前述のF氏やその兄弟は、移民宿をとおして移動してくる人びとに関わるだけでなく、まだ海外旅行や海外留学が珍しかった時代に自らも海外へと出ていくのである。F氏の兄の一人は、日本で大学を出た後カリフォルニアの大学に留学し、その後日本の大手企業の海外の支店長を務めたりしている。F氏もまた日本で大学を出た後、見聞を広めるため海外にということになったとき、「K旅館」を利用してハワイからの観光団の団長の世話を受けたなどしてハワイに渡っている。

1-2 移動の経験の記憶の重なる場としての横浜

ここで横浜という場所に重ねられた記憶と経験について、もう少し詳しく見ておこう。

筆者は以前、人びとの移動をめぐる経験について、本人の直接的な移動の経験、移動者に関わることにともな

う経験、そして自らの両親や祖父母などの直接的な移動の経験から派生する記憶としての移動の経験の三つを提示したことがある（藤原 2008）。この三つめの記憶としての移動の経験の意味とは、まず一つに「定住」と「移動」との二項対立的な場所とのかかわり方、場所への自らの位置づけ方に対する問題提起であった。その場所に生まれ育ったとしても（育ったからこそ）、定住者あるいは移動者のどちらとも異なる場所とのかかわり方や位置づけ方をする人びとがいる。国境を越えて移動する人びとは、畢竟、社会の枠組みの中でメイン・ストリームとは異なる人びととなる。けれどもそうした人びとを親や祖父母に持つ人びとは、その親ないし祖父母の移動にともなう経験を記憶として継承し、日常生活のさまざまな場面で移動者としての自分に直面する。それは時として負の経験にもなるが、正の経験として既存の社会の枠組みとは異なるアイデンティティや生き方の可能性にも繋がる。そしてだからこそ二つめとして、こうした人びとが生活している世界が、一つの社会の枠組みだけでは収まらない世界であるということである。その前提としてのもう一つの社会として重ねられているのが、記憶としての移動の経験の先にある社会である。

この記憶としての移動の経験の場が横浜であった。そして沖縄を自らの「ルーツ」とするある家族の人びとの記憶としての移動の経験は、横浜と沖縄とを重ね、そしてさらにそこに展開していた国境を越えて移動する人びとの出身社会とも重ねられ、それは二重、三重に重ねられたいくつもの社会によって構成された世界での経験であった（藤原 2008）。

1-1で提示したのは、むろん記憶としての移動の経験ではない。だが、移動する人びととかかわった経験—前述した二つめの移動の経験—をとおして、やはりF氏やI氏はそこに今いる社会とは別のもう一つの社会を思い描いてはいないだろうか。

海外へ渡っていかうとするとき、人びとはそこに今いる社会とは別のもう一つの社会を思い描く。言葉が通じるのか、どのような生活をしているのか、自分はどのような仕事に就き、どのような労働をすることになるのか。そこで自分は何を成すことができるのか。また海外へ渡っていった人びとはそこで、今いる社会とは別に自らが発ってきたもう一方の社会を思い描いている。家族や地域の人びとはどのような状況なのか。何が人びとの話題に上っているのか。むろんそれぞれの人びとは今いる社会からのさまざまな規制の下、対処しながら、しかし同時に二重、三重に重なり合う社会を思い描き、そし

て現実に二重、三重に重なり合う世界を生きている。それが本稿で取り上げる「回路的世界」である⁶⁾。そして、「回路的世界」を支え、移動する人びとを支える移民宿の人びとも同様に、移動する人びとと関わることでもう一つの社会を思い描く。彼らは必ずしも自らが直接的に移動するわけではないが、移動する人びとを支え、関わることをとおして移動を経験していく。

そもそも本稿で取り上げる移民宿とは、単なる宿泊施設ではない。拙稿で述べたように、それは国境を越える人びとの移動を支える装置である（藤原2011）。そしてこの移動を支える装置である移民宿が形成された場所は、そこを起点として人びとを他の場所へと繋ぎ、また場所と場所とを繋いでいく交差点となる⁷⁾。

横浜の移民宿は、戦後多くの海外からの観光団の宿泊施設となったことは前述したが、その観光団を出していたのが、海外の出発地にあった「日本人旅館」であり「トラベル・エージェンシー」であった⁸⁾。「K旅館」を訪れた「吉永・米屋合同観光団」、この「米屋」というのもハワイ・ホノルルにある「日本人旅館」であり「トラベル・エージェンシー」の一つである。F氏のハワイ行きも、こうした「日本人旅館」や「トラベル・エージェンシー」との繋がりのなかで成立していたのである。

次節では、移民宿が繋ぐもう一方の移動の経験の記憶の重なる場所について見てみていこう。

2. 日本から布哇への人びとの移動

本節ではまず、もう一方の移動の経験の記憶の重なる場所としての布哇ホノルルへの人びとの移動の経験の全体像として、日本から布哇への移民の概要について見ておく。

2-1 官約移民から呼び寄せ移民まで

周知のとおり日本からの最初の移民が渡っていった先がハワイである。これまでに日本からハワイに渡っていった移民に関しては数多くの研究がなされているので、ここでは本稿に関わる範囲で、日本からハワイに渡っていった人びとのその概要について見ておきたい。

そもそも日本からの移民は、1868年の明治元年にハワイに渡っていった「元年者」と呼ばれる人びとをその端緒とするが、継続的に移民が渡っていくようになるのは、1885年（明治18年）に始まる官約移民からである⁹⁾。官約移民として、1894年（明治27年）6月までの9年間26回にわたり29,139人の渡航者が渡っていった¹⁰⁾。表1にあるように毎回1,000人前後の人びとが渡

表1 官約移民回数別渡航表

回数	到着年月日	船名	員数	回数	到着年月日	船名	員数
1	明治18年 2月 8日	東京市号	946	14	明治23年 6月17日	相模丸	555
2	18 12 5	山城丸	988	15	24 3 11	山城丸	1,093
3	19 2 14	北京丸	927	16	24 3 30	近江丸	1,081
4	20 12 11	若浦丸	1,447	17	24 4 28	山城丸	1,091
5	21 6 1	高砂丸	1,063	18	24 5 29	同	1,488
6	21 11 14	同	1,081	19	24 6 18	三池丸	1,101
7	21 12 26	同	1,143	20	25 1 9	山城丸	1,098
8	22 3 5	近江丸	957	21	25 6 25	同	1,124
9	22 10 1	山城丸	997	22	25 11 28	同	995
10	22 11 11	同	1,050	23	26 3 6	三池丸	733
11	23 1 9	同	1,064	24	26 6 6	同	1,811
12	23 4 2	同	1,071	25	26 10 23	同	1,643
13	23 5 22	同	1,068	26	27 6 15	同	1,524
合計 (内・男23,340、女5,799)							29,139

注：ハワイ日本人移民史刊行委員会編、1964『ハワイ日本人移民史』99ページの「官約移民回数別渡航表（1）」を作成しなおしたものである。なお、海外興業株式会社編『日本移民概史』では、日本郵船による官約移民事業として「官約布哇移民郵船社船輸送表」を載せているが、それによると、本表の第1回と第3回がなく、本表に則して見ていくと第2回は12月15日、第8回は3月3日、第14回の員数596人、第18回の員数1,439人、第19回の員数1,073人、第20回の員数1,093人、第21回は6月21日、員数1,075人、第22回の員数957人、第23回の員数728人、第24回は6月19日、員数1,729人、第25回の員数1,606人、第26回は6月28日、員数1,541人となっている。

航し、最後の3回の官約移民においてはそれまでの1.5倍から2倍近くの人びとが渡航している。

『ハワイ日本人移民史』よれば、私約移民が開始される当時、ハワイの日本人からの日本への送金額は毎年200万円に達しており、渡航希望者の増加に伴い民間の周旋人が出てきて問題になっていた（ハワイ日本人移民史刊行委員会1964：145）。こうした背景もあり、1893年に「移民保護規則」が制定され、翌1894年7月以降から移民会社¹¹⁾によって移民が取り扱われることになる。1894年から1900年（明治33年）までの6年間は私約移民の時代である。移民会社が扱ったハワイへの渡航者数はおよそ4万人であった（表2）。

こうした移民会社は、移民を送り出した先の布哇ホノルルにも事務所を設けていた。『ハワイ日本人移民史』では、「ホノルル市フォート街、マーチャント街に各社協同の事務所を設け、移民と砂糖会社の双方から手数料をとり、汽船会社からは移民輸送の船賃の割戻を受けて莫大な利益を得た」と述べている（ハワイ日本人移民史刊行委員会編1964：147）。

契約移民の時代にも労働契約ではなく海外に渡っていく人びとも多くいたわけであるが、1900年ハワイがアメリカ合衆国に併合され契約移民が廃止されることになり、1908年（明治41年）に日米紳士協約が実施されるまでの期間がいわゆる自由移民の時代である。この間日本

表2 移民会社の創立年月と取り扱ったハワイ渡航移民数

創立年	移民取扱人	所在地	取扱移民数	(内女性)
1894年	小倉 幸	大阪	約2,500	(記載なし)
同	神戸渡航合資会社	神戸	900	(193)
1896年	海外渡航会社	広島	10,731	(1,981)
同	森岡 真	東京	8,148	(1,441)
同	熊本移民合資会社	熊本	7,738	(不明)
同	日本移民合資会社	神戸	5,800	(500)
1898年	東京移民合資会社	横浜	3,382	(700)
合計			39,199	

注：ハワイ日本人移民史刊行委員会編、1964『ハワイ日本人移民史』146-147ページの第1表より筆者が作成しなおしたものである。

から渡ってきた人びとの数について、『布哇日本人史』では当時の布哇政府調査をもとに記載された『布哇年鑑』から日本人の出入国者数として、入国者68,326人（内訳：男性55,634人、女性12,412人、子ども280人）と記している（木原1935：163）。

そして1908年に日米紳士協約が実施されるに伴い、在ハワイの日本人の近親者およびいわゆる「写真花嫁」が呼び寄せ移民として渡っていくことになる。アメリカ合衆国への日本からの移民が禁止される1924年（大正13年）までおよそ3万6千人の呼び寄せ移民が渡っていっ

表3 各時代の移民（渡航者）概数

	期 間	人 数 (人)
官約移民時代	1885-1894	29,139
私約移民時代	1894-1900	約40,000
自由移民時代	1900-1908	68,326
呼び寄せ移民時代	1908-1924	約36,000

注：ハワイ日本人移民史刊行委員会編、1964、『ハワイ日本人移民史』本文中に記載されている各移民時代ごとの人数から筆者が表を作成したものである。

た（ハワイ日本人移民史刊行委員会編 1964：175）。

第1回官約移民が始まった1885年からアメリカ合衆国への移民が禁止される1924年までの39年間で、日本からハワイに渡っていった人びとは17万人を超えている（表3）。

2-2 ホノルルの日本人街

では、こうした人びとが渡っていった先のハワイにおいてどのような世界がつくられていたのか。ハワイ・ホノルルのダウンタウンの北隣りの地区に展開した日本人街の概略を確認しておこう。ここではいくつかの文献を引用しながら、日本人街の様子を見ていく。

「当時リバーに沿う、パウアヒとマウナケアの街を中心とするホノルルの一角には、人呼んで『魔窟』という無頼の徒のたまり場があり、酒と女が満ち満ちていた。燈火は夜どおしあかあかとともり、みだらな唄、三味線の音、嬌声、罵声などが絶えることなく、リバーの水面に灯影が、キラキラと映り輝くところ、限りない騒鳴が遠近に反響した」（ハワイ日本人移民史刊行委員会編1964：154）。

こうしたホノルルの日本人街の状況が一変するのが、1900年に起こったペスト焼払い事件である。前年の12月にペスト患者がチャイナタウンに発生し、患者が発生した家屋を伝染予防のために焼払っていた。翌1月に行われた焼払いにおいて、焼払いの対象となった家屋が風上にあったこと、当日強風であったことなどにより日本人街を含むマウナケア、リバー、スミス、ベレタニアといったダウンタウンの一面を全焼することとなる（木原、1935；ハワイ日本人移民史刊行委員会編 1964）。

このペスト焼払い事件によって焼け出されたものは6,000人以上とされ、日本人については3,589人に及ぶとされる（木原 1935：524）。また焼失家屋については、

『ハワイ日本人移民史』では176軒としている（ハワイ日本人移民史刊行委員会編 1964：158）。『布哇移民史』では焼失家屋が挙げられているが、教会、商店、時計店、金物店、裁縫店、宿屋、料理店、写真店、工場、湯屋、理髪店、菓子店、氷屋、貸し長屋、診療所、新聞社、団体事務所、遊技場などがその詳細である（木原1935：527-528）。この被害状況からでも、当時のホノルルのダウンタウンの北隣りの一画に形成されていた日本人街の多種多様に展開していた街の姿が垣間見えてくる。

またペスト焼払い事件の被害の対応にあたるために同年に「臨時日本人会」が設置され、その翌年には、アメリカ丸乗船の日本人女性の侮辱事件¹²⁾の解決のための「布哇日本人会」が組織され、1903年（明治36年）には「中央日本人会」創立運動が起こっている。そして創立した「中央日本人会」に対する不信や移民会社をめぐる問題に対して、1905年（明治38年）には「革新同志会¹³⁾」が結成される（ハワイ日本人移民史刊行委員会編 1964：161）。いずれの組織も1年余りですべて立ち消えか解散しているのだが、表4からもわかるように1900年にはハワイにおける日本人の人口が6万人を超えており、こうした組織設立の動きは、ハワイの人口の39.6%を占めるまでに成長してきた日本人の、そして日本人コミュニティのその成長過程の一端を示すものであったと言えるだろう¹⁴⁾。さらにこの年以降、契約労働が廃止され耕地で労働に従事していた人びとの移動が自由になり、その後の耕地でのストライキを経て、ホノルルやヒロといった町場に人びとが増加していくのである（図3）（ハワイ日本人移民史刊行委員会編1964：318-319）。

しかしこうした日本人街の発展、日本人コミュニティの台頭は、アメリカ本土を背景とする日本人排斥運動をも同時に引き起こしていく。

1909年（明治42年）の第一次オアフ耕地大ストライキや1920年（大正9年）の第二次オアフ島耕地同盟大ストライキ、同年のアメリカ合衆国における外国人学校取締法による日本語学校の取締りなどが次々と起こっていくが、いずれもが日本人に対する「アメリカ化」への圧力を孕んだものとしてみる事ができる。それは単にアメリカあるいは布哇ホノルルにおける日本人差別という問題だけではなく、日本からハワイに渡ってきた人びとに自らが足場とする場所とのかかわり方を問いかけるものであったと考える事ができる。『ハワイ日本人移民史』では、二世の教育方針の変遷として、第一期を「ハワイに生まれた二世も同じような日本人」とする時代（1910

表4 ハワイ日本人人口の動き

年	人口(人)
1885	2,039
1890	12,360
1895	22,462
1900	61,111
1905	59,956
1910	79,674
1915	93,136
1920	109,274
1925	128,068
1930	139,631
1935	148,972
1940	156,849

注：ハワイ日本人移民史刊行委員会編、1964『ハワイ日本人移民史』315-316頁より筆者が作成した。

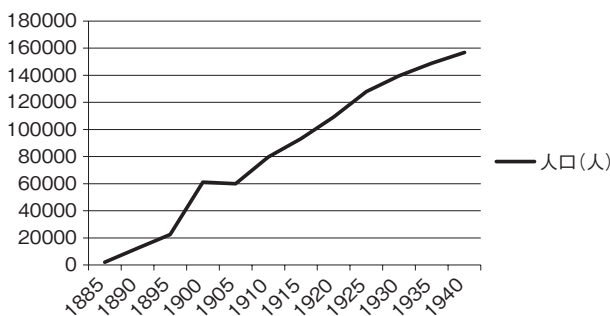


図3 ハワイ日本人人口の動き
注：ハワイ日本人移民史刊行委員会編、1964『ハワイ日本人移民史』315-316頁より筆者が作成した。

年頃まで)、第二期を二世をアメリカに順応させるように教育した時代(1924年頃まで)、第三期を「二世即アメリカ市民」という見方となった時代(1925年以降)の三つに分類しているが(ハワイ日本人移民史刊行委員会編1964:231)、第一期から第二期への移行期においてハワイ生まれの二世の成長とともに、送り出し社会、受け入れ社会それぞれとの繋がりをどうつけていくのが問題となっていたと言えるだろう(表5)。

3. 移民宿が繋ぐもう一つの移動の経験の記憶の重なる場所

では、こうした日本からハワイに渡ってきた人びとが日本人街を形成していくなかで、「移民宿」はどのような位置を占め、どのような役割を担っていたのか。第1節において示したように、「日本人旅館」を一つの装置

表5 日系市民および非市民比較表

年度	日系市民	非市民日本人
1896	2,076	22,329
1900	4,877	56,234
1920	49,016	60,258
1929	87,784	49,659
1940	122,188	34,661

注：ハワイ日本人移民史刊行委員会編、1964『ハワイ日本人移民史』316頁掲載の日系市民および非市民比較表から変則的ではあるが、取り出して新たに表として筆者が作成した。

として、その場所に人びとの移動の経験や記憶がどのように重ねられているのか、その一端を探っていく。

3-1 布哇ホノルルの「日本人旅館」

まずホノルルの日本人旅館の概要について見ておこう。

表6は「ホノルル日本人宿屋組合」に加入していた日本人宿屋をまとめたものであるが、この組合がハワイの日本人最初の商業団体として1893年(明治26)頃に組織されたものである(堀2007;タサカ2002;ハワイ日本人移民史刊行委員会編1964;日布時事社編1935¹⁵⁾)。これらの宿屋は日本からハワイに渡ってきた人びと、その多くが契約移民であった人びとが最初に受け入れ社会で足場とする施設であった。そのため港に近い、1900年のペスト焼払い事件で焼失するホノルルのダウンタウンのヌアヌ街、ベレタニア街、ホテル街、スミス街、パウアヒ街、マウナケア街などに立地しており、この焼払いによって、宿屋組合事務所、川崎旅館(兼商店)、柳井屋、小林旅館(兼商店)、氷屋肥後屋(兼料理店)、広島屋、大島屋、角屋九州亭(兼料理店)、岩国屋、福岡屋(木原1964:527)などが焼失している。ペスト焼払い事件から間もなく出版された『今日の布哇』では、多くの宿屋の広告が掲載されているが、その広告にある所在地を見てみると表7のとおりであり、これらの宿屋の多くが、焼け出されたのち早々にリバー街やクイ街、リリハ街、パラマなどに移って営業を再開しているのがわかる(表8)¹⁶⁾。

そしてペスト焼払い事件から5年後、第2節でも触れたが1905年に「革新同志会」が組織され、その結果契約移民の担い手であった移民会社が1906年にハワイから撤退していった。つまり移民会社を取り扱っていたものも含めて移民宿が「すべての移民の渡航手続きを代行する」(タサカ2002)ようになり、また自由移民の時代に入り、ハワイからアメリカ本土へ転航する人びとが増加

表6 日本人宿屋組合のメンバー (1893年頃)

宿屋名	経営者	備考
中国屋	藤本七蔵	のちの米屋旅館前身
福岡屋	市川熊太郎	
布哇屋	小林卯之助	
肥後屋	木村彌三郎	
広島屋	錦田直太郎	
川崎屋	川崎喜代蔵	
菊屋	岸本長四郎	
岸本旅館	岸本敏裕	
	佐藤好助	
熊本屋	渡辺宗五郎	
九州屋	伊豆野甚太郎	
水羽屋	水羽源三郎	
大島屋	西村周助	
太田屋	太田米蔵	
吉野屋	山城松太郎	のちの山城旅館前身
	長谷助三	

注：日布時事社編、1935『官約日本移民布哇渡航五十年記念誌』116頁の「歴史を誇るホノルル日本人旅館組合」より作成。

表7 『今日の布哇』 広告掲載の日本人宿屋

宿屋名	所在地
西村旅館	フカウリケ街
川崎旅館	クイーン街
熊本屋旅館	停車場近く (アアラ公園近く)
柳井屋旅館	ベレタニア街
山城屋旅館	ベレタニア街
福岡屋旅館	リリハ街
米屋旅館	リバー街
九州屋旅館	パラマ
原本旅館	マヌアケフ街
肥後屋旅館	リリハ街
小林旅館	パラマ
小松屋旅館	パラマ
神州屋旅館	パラマ

注：満長彰、1904『今日の布哇』 掲載のホノルルの日本人宿屋の広告から筆者が表にまとめた。

することになり、その転航の業務も含めてホノルルの移民宿は第一の送り出し社会である日本とハワイを繋ぎ、さらには第二の受け入れ社会であるアメリカとハワイを繋いでいく役割を担っていったのである。

たとえばタサカは「芳我日下氏が『漢城旅館』をダウンタウンに新設して転航移民の宿泊と輸送に手を染め、

表8 ホノルル日本人旅館組合 (1935年当時)

旅館名	経営者
布哇屋旅館	嘉敷□一
ホノルル旅館	島袋清
東北旅館	東海林甚七
尾道屋旅館	小出祐一
川崎屋旅館	川崎正一
中村旅館	中村勇一
山城旅館	山城松太郎
小林旅館	小林セキ
小松屋旅館	佐藤一郎
米屋旅館	米屋三代植
西海屋旅館	長谷川速水
九州屋旅館	具志堅政真
神州屋馬場旅館	馬場徳慈
組合長	山城松太郎
副組合長	東海林甚七
書記	小出祐一
会計	川崎正一
監査	米屋三代植

注：日布時事社編、1935『官約日本移民布哇渡航五十年記念誌』116頁の「歴史を誇るホノルル日本人旅館組合」より作成。組合員および組合役員については出版当時のものである。なお、布哇屋旅館の嘉敷氏の氏名については、資料より読み取れず□で記してある。

シアトルの幹旋業者と組んで大々的に転航事業を行った」こと、また「アメリカ本土の旅館業者やホノルルの旅館業者、川崎・小林・米屋・山城など…24軒もの業者が転航業務に力を入れて、その全盛期には臨時線を仕立てて、一挙に三、四千人もの日本人男女の労働者をアメリカ本土に送り込」んだと述べている (タサカ2002)。アメリカ本土への転航者の数は、1901年から1906年までにおよそ5万7千人及んだとされる (タサカ 2002; ハワイ日本人移民史刊行委員会編 1964: 169)。

そして日本から渡ってきた人びと、アメリカ本土へと渡っていく人びとを支えるだけではなく、一方では日本への橋渡しも担っていた。『ハワイ日本人移民史』によれば、ハワイの日本人の日本への観光団は、1912年 (明治45年) 田坂養吉を団長とする一行50人である。こうした観光団は太平洋戦争が始まる直前まで続き、非常に盛んに行われた (ハワイ日本人移民史刊行委員会編1964)。またタサカによれば、1912年の観光団の目的は、「単なる物見遊山、親見舞、郷里訪問ではなく、…砂糖産業を

はじめハワイの各方面に進出してハワイの発展に貢献している現状を広く日本の人びとに紹介するとともに、ハワイ在留の日本人が自分自身の眼で世智がらい日本の生活状態を見て、ハワイに永住土着の決意を固めさせよう」というものであったと述べている（タサカ2002）。そして終戦ののち1949年に観光団が再開され（ハワイ日本人移民史刊行委員会編 1964）、多くの観光団がハワイから日本へと「日本人旅館」と移民宿との連携のもとやってくることになるのである。

3-2 「日本人旅館」から見る移動の経験の記憶

では、こうした布哇ホノルルの日本人コミュニティの中で、「日本人旅館」の関係者たちは、移動する人びととかかわりながら、また自らも移動の記憶を継承しながら、どのように回路的世界を生きていたのだろうか。筆者が共同研究の一環¹⁷⁾で行ったホノルルでの「Kトラベル」のK氏（87歳）への聞き取り調査をもとに、ホノルルの「日本人旅館」と横浜の移民宿を繋いで展開した移動の経験の記憶の一端を見ていく（図4）。

「日本人旅館」の担った役割について、まずは移民の出入国の手続きである。K氏は「上陸前に収容所で1週間ほどかけて検査を受ける。その間に船会社をとおして、本人が上陸する前から新聞に来布者の名前が載る。それを見て旅館の人間が書類をそろえて迎えに行き、連れてきた」のが当時の状況だったと話す。特に契約移民については、ホノルルで入国手続きをしたのち、契約先

のほかの島々の耕地に渡っていくことになるのだが、「たとえばホノルルからハワイ島のヒロまで船で一日かかった。しかも毎日船が出るわけではないので、行って戻ってくるのに1週間くらい全部でかかることになる。だから旅館で、役所への届け出に関するもの（婚姻届、出生届、死亡届、徴兵の延期の届けなど）旅券も預かってさまざまな手続きをすべて代行」していたのである。

こうした旅館の役割について、K氏は「県を代表して預かっているようなものだった。そのためそれぞれの旅館を利用する人たちも、当時はかなり出身ごとに分かれていた。旅館は、同じ郷里の人たちが頼りにしているところで、頼りにされていたから、旅館組合は、その代表としてまとめ役的なことをしてきた。旅館に声をかけることでみんなが動きもした」と述べている。

前述したようにハワイでの日本人の地歩が築かれていくなか、さまざまな活動が起きてくるが、その一つにオアフ島の第一次、第二次ストライキがある。このストライキにおいても、「日本人旅館」はその中心の一つとなっている。「アアラパークの公会堂が日本人の集合場所だったが、このアアラパークに集まった人たちに炊き出しをしたり、旅館に泊めたり」と耕地から出てきたストライキ参加者たちの支援を行っている。『ハワイ報知創刊75周年記念誌』によれば、山城旅館の当主、山城松太郎は1909年の第一次オアフ島ストライキに際し、1908年に結成されたプランテーション労働者の増給要求を背景に結成された「増給期成会」の中心メンバーの一人とし

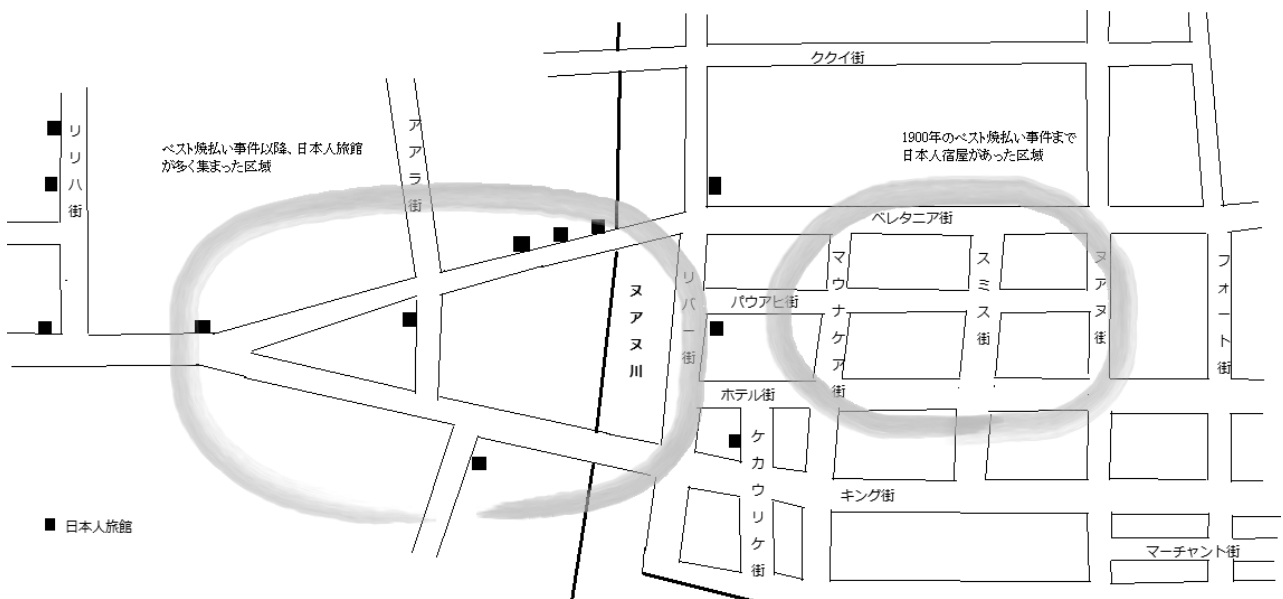


図4 ホノルル移民宿分布図

注：木原隆吉、1935『布哇日本人史』523頁および飯田耕二郎、2003『ハワイ日系人の歴史地理』85頁の「旅館の分布図」を筆者が組み合わせて作成したものである。

て増給要求からストライキへの運動の一端を担っていた(渡辺1987)。

K氏のこうした「日本人旅館」についての話は、移民宿についてのF氏の発言とも重なるように、「日本人旅館」を中心として人びとの移動が支えられ、またそうした人びとの受け入れ社会での生活を支える役割を担ってきたという自負であり、K氏の移動の記憶の経験の一つと言えるのかもしれない(写真3)。

K氏自身は、人びとの移動に関わるだけでなく、日本とハワイの間の、さらには日本と満州との間の移動を経験している。K氏はハワイ生まれの日系二世にあたるのだが、日本語を習わないと商売にならないということで日本に渡り、ハワイに戻ったのは1950年(昭和25年)である。日本では小学校1年からやり直し、旧制中学を出て、大学に進学するのだが、二重国籍で日本の徴兵検査を受け待機状態であったことにより、日本の軍隊に取られるのを心配した母親の意向もあり、中国のほうの学校に行けば徴兵が猶予されるとのことで満州の大学に転学している。そのため終戦を満州で迎えている。K氏自身は、終戦後の満州からのシベリア抑留の列車に偶然乗らずに済んだために無事帰国することができた。そして再びハワイへと戻っている。

こうした直接的な移動の経験のなかで、K氏は戦時において兄弟それぞれが日本軍、アメリカ軍という敵味方になってしまうという経験をし、またK氏自身の終戦後日本への帰国に際しての日本政府の対応、さらには「海外にいる日本人に対する政府の無関心」といった日本の国に対する不信感なども抱えている。一方自分の次の世代について、「日本語はわからなくなっているし、国籍も完全なアメリカ人」として捉えており、そのことを背景としてそうした世代のハワイ社会の中での地位の上昇に対しての感慨も持っている。「戦前は、英語学校の教員を日系人がやることはなかった。戦後になって、官庁に勤める人や教員が増えていった」と述べている。

戦後の観光団の送り出しについては、前述した横浜の移民宿の主人についても、「Iさんはよく知っている。うちでもお世話になったし、Iさんもハワイに何度か来てくれたし。」と話している。I氏の息子であるF氏への聞き取りにおいて、「ハワイの旅館のほうから、観光団で誰それが、いついつの船で行くという連絡をよくやっていましたよ。当時は、電話もないから、手紙だね。」と語っていた。またそれは仕事だけの付き合いというよりも、I氏に対するK氏の話でもそうだが、F氏もまた自らのハワイ行きに際し、親しくしていた観光団



写真3 ホノルル・ベレタニア街に並ぶ「日本人旅館」

注：ハワイ・ホノルルの小林トラベル・サービスの副社長である小林達吉氏所蔵の写真を撮らせていただいたものである。手前から山城旅館、尾道屋旅館、小林旅館が並んでいる。小林トラベル・サービスは「日本人旅館」の一つである小林旅館から戦後、業務拡大に伴って立ち上げられた。

の団長やホノルルの「日本人旅館」に世話してもらったのだというように、人びとの移動を支えるなかでつくられていく人びとの繋がりでもある。

日本からの移民が途絶えるようになり、1970年頃旅館をやめ、「トラベル・サービス」と観光用のバス会社に衣替えをしている。現在は、主に日本やアメリカに行くツアーを扱ったり、日本からハワイに来る観光客のツアー・オプションなどを扱っている。K氏の旅館だけでなく、多くの「日本人旅館」が戦後は「トラベル・サービス」に衣替えをしている。

ホノルルにある「日本人旅館」の一つから見る移動の経験の記憶のほんの一端をさらったにすぎないが、それでもK氏のさまざまな移動の経験とその記憶は、日本という社会や横浜という場所、ホノルルという場所やアメリカという社会と離れがたく結びついている。ここでは取り上げなかったが、K氏の両親の郷里である広島という場所との結びつきもある。複数の国家や社会、そして場所とのかかわりのなかで、また複数の国家や社会、そして場所のはざまで、さまざまな移動の経験がなされ、その記憶が積み重ねられている。

おわりに

本稿では、横浜とホノルルという二つの場所につくられた移民宿をめぐって展開した人びとの移動の経験の記憶をとおして、二つの場所を繋ぐ回路的世界の一端を描こうとしてきた。では、移民宿および「日本人旅館」をめぐる実践から何を読み取ることができるのか。

一つには、ホノルルの「日本人旅館」のK氏の移動の経験や記憶をとおして見えてくる複数の場所を繋ぐ装置としての移民宿の役割であり、また国境を越えて移動する人々の移動の経験や記憶を背景として複数の場所や

社会、国家と関わる人々の生き方の一端である。ただしそれは、過去の移動の歴史ではなく、現在の移動を支える実践の一部でもある。筆者は、これまで現在のブラジルから日本に移動してきた日系の人びと、特にその子ども世代を中心に移動を背景に置きながら当該の社会に自らをどのように位置づけていくのかということや、そうした人びとの生き方やアイデンティティについて見てきたが、そこから浮かび上がってくるのは、人びとと場所との結びつき方である。国家への所属はもちろんあるのだが、必ずしも国家に結びつこうとするわけではないし、またルーツや民族も人びとにとって必ずしも所与のものとしてあるのでもない。ルーツは特定の国家や共同体にあるのではなく、移動をめぐる経験とその記憶を手がかりとした人びととのつながりやそうした経験への「共振」をルーツとして提示されていた。同様にそれは3-2で示したK氏の日本やアメリカ、ハワイや広島、日本人やアメリカ人、日系人それぞれへの思いのなかにも垣間見ることができるだろう。それはアイデンティティの位相の違いというだけでなく、移動の経験や記憶を背景におくことで、国家や社会、民族やルーツが経験や記憶をとおして改めてつくられるものとしてあるということができないのではないか¹⁸⁾。

そしてそうしたことと関わるのだが、二つめとして、移民宿および「日本人旅館」をめぐる実践から見えてくるのは、複数の世界が交差する場所としての都市的世界の姿である。たとえばホノルルの「日本人旅館」であれば、そこに関わるのは日本人だけでなく、日本人街と接する中国人街の人びとであり、現地のハワイの人びとであり、アメリカ本土から来た人々であり、ポルトガルやその他の国々からの移民の人びとである。入国に際して、日本への手続きに際して、労働問題に際して、日々の生活に際して、さまざまな出来事に関わって異なる人びととの関わりが生じ、それらが単独ではなくさまざまに重なっていく。日本政府への反感であったり、アメリカ社会への抵抗であったり、労働問題への共闘であったり、商売上の反目であったりといった出来事の重なりのある場なのである。それは出来事の重なりであると同時に、異なる場所や世界の重なりでもある。それが複数の世界が交差する場所としての都市的世界ということである。

本稿では、人々の移動の経験の記憶として戦前の布疋へ渡っていった人びとをその手がかりとしたが、現在の国境を越えて移動する人々をめぐる、複数の世界が交差する場所としての都市的世界＝回路的世界とはどのような世界として展開しているのか。今後の課題とした

い。

謝辞

本稿を執筆するにあたって、多くの方々にお世話になった。貴重な個人のアルバムなどの資料をお貸しいただいたり、思いもよらない資料を探し出していただいたりしている。ここでは個人の方のお名前は差し控えるが、ハワイの日本文化センター資料室、小林トラベル・サービス、ハワイ報知新聞、財団法人横浜貿易協会、海外移住資料館などの方々にお世話になったこと記して感謝したい。

*本研究は、文部科学省科学研究費「基盤研究(C)」 「日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムと場所」(課題番号:22530569;平成22-24年)の助成を受けたものである。

注

- 1) 横浜貿易協会が所有する建物で、『創立100周年記念誌』によれば、1905年に輸出堂業者の親交団体として横浜輸出協会が創立され、1927年に社団法人横浜貿易協会と改称され、会館については1928年に落成している。
- 2) 「横浜外航旅館組合」についての資料は現在のところ見つからず、その詳細については不明であるが、「K旅館」のF氏の自分が大学を出た前後の時期頃まで続いていたのではなかったかという話および事務所のあった貿易会館の賃貸契約では、昭和46年3月末までの書類があることなどからおおよその時期として示した。
- 3) もともと多くの移民宿は海岸通から桜木町を結んだ近辺で営業していたのだが、戦後はGHQによる接収や日本人の乗った船の着く棧橋が、大棧橋ではなく現在のホレンガ倉庫の辺りであったことなどから、戦後多くの移民宿が桜木町駅の近辺での営業を再開している。1956年(昭和31年)版の横浜市中区および西区の明細地図でも桜木町および花咲町付近に「K旅館」をはじめとして「横浜外航旅館組合」の旅館がいくつも集まっているのがわかる。
- 4) 「K旅館」のF氏から、1958年に旅館が建てられる前以前、花咲町で営業していた当時の観光団の写真や、「新館落成」に伴って海外の日系新聞に掲載された広告やお祝い広告などの切り抜きが整理されているアルバムをお借りしたものである。ホワイトペンで書かれているため写真からは分かりづらいが、観光団名と撮影日が記されている。
- 5) 本節での聞き取りは、2010年7月から8月にかけて、文部科学省科学研究費「基盤研究(C)」 「日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムと場所」(課題番号:22530569;平成22-24年)の広田康生氏との共同研究で行った聞き取り調査の一部である。
- 6) 広田康生は、回路的世界について、場所と場所とを繋いで形成される世界であることによって、国民国家の枠

組みとは異なる原理の社会的条件がそこに呈示されることになるのだとし、そのことがトランスナショナリズム論と都市社会学の課題—「下からの都市論」との接合において焦点となる「下からの都市的世界」像を構想する一つの手がかりとして回路的世界を描くことの重要性を指摘している（広田2012）。

- 7) こうした場所を広田康生はトランスナショナリズム論と都市社会学の課題—「下からの都市論」との接合について論じるなかで「クロスロード」として提示しているが（広田2012）、まさにその場所を「クロスロード」たらしめている装置の一つが移民宿である。そして本稿は、移民宿を手がかりとして、そうした直接、間接的な移動の経験の記憶の重なる場としての都市的世界の一端を描くことを目的とするものである。
- 8) 拙稿「移民宿にみる都市横浜」（2010）でも述べたように、戦前戦後をとおして日本から海外に渡っていく人びとのための宿泊施設としてあったのが外航旅館すなわち移民宿である。ホノルルには同様に日本から渡ってきた人びとのための施設として「日本人旅館」があった。戦後、旅館の利用者が減少していくなか、これらの「日本人旅館」は店を畳んだところもあるが、「トラベル・エージェンシー」として旅行に関わる業務を行う企業へと衣替えしていく。
- 9) 本稿では、『ハワイ日本移民史』の時代区分に依っている。
- 10) 『ハワイ日本移民史』においても、『布哇便覧』やホノルル日本総領事館調査などいくつかの異なった数値が挙げられている。
- 11) 移民会社とは、1894年4月に公布された「移民保護規則」第1条にある「移民取扱人」が法人組織となったものである（石川1970: 20）。
- 12) 1901年（明治34年）ホノルルに入港したアメリカ丸に乗船していた日本人女性4人の検疫にあたって検疫官が不必要な検査を行い彼女たちの人権を蹂躪したという事件である（ハワイ日本移民史刊行委員会1964: 159）。
- 13) 革新同志会の活動により、ホノルルの移民会社1906年までにほとんど姿を消すことになった（ハワイ日本移民史刊行委員会編、1964: 163）。
- 14) ちなみにa'alaによれば、ハワイの日本人人口およびハワイの人口に占める割合は、1900年61,111人で39.6%、1910年79,675人で41.5%、1920年109,274人で42.6%、1930年139,631人で37.9%、1940年157,905人で37.3%である（Okihiro 2003: 7-8）。
- 15) 『ハワイ・小林旅館』および筆者が現小林トラベル・サービスの副社長である小林達吉氏から複写させていただいた資料（「小林旅館沿革史」この資料の出典は不明である）では、1893年に「日本人宿屋組合」設立前に、17軒の旅館にて「ホノルル日本人聯合旅館」が組織されたが、3、4カ月ほどで解散し「日本人宿屋組合」が設立されたと記されている。
- 16) その後パラマなどに移転していた旅館も再びダウン

ウンに戻ってくるのだが、日本人街の中心はその後ヌアヌ川を隔てたアアラに代わっていく。（Okihiro 2003; 木原1935; ハワイ日本人移民史刊行委員会編1964）。

- 17) 2011年8月27日から9月3日にかけて「K旅館」をはじめ、「K旅館」のK氏をご紹介していただいたハワイ報知新聞社（金泉氏）、日本文化センターその他で専修大学の広田康生氏との共同および個別に行った聞き取り調査の一部である。
- 18) 経験や記憶は、どんなに個人的なものであっても、それは他者との、社会とのそして国家との関わりのなかで展開するものであるし、そこにナショナルなものが強く反映される。それでも同じ経験の共有や同じ記憶の共有ではなく、個々別々の移動の経験や記憶を契機として常に生成されるものとして社会や場所とのつながりやアイデンティティの提示がなされているというのが、本稿での趣旨である。

文 献

- 藤原法子, 2008,『トランスローカル・コミュニティ』ハーベスト社
- , 2011,「移民宿にみる都市横浜」『人間科学論集』第1号第2篇
- 芳賀武, 1990,『蒼氓の移民宿（大正6年ハワイを旨とした17歳少年のヨコハマ物語）』創英社
- ハワイ日本人移民史刊行委員会編, 1964,『ハワイ日本人移民史』布哇日系人連合協会
- 広田康生, 2012,「日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズム研究への都市社会学の接近」『人間科学論集』第2号第2篇（2012年3月刊行予定）
- 堀ちず子, 2007,『ハワイ・小林旅館』
- 飯田耕二郎, 2003,『ハワイ日系人の歴史地理』ナカニシヤ出版
- 石川友紀, 1970,「日本出移民史における移民会社と契約移民について」『琉球大学法文学部紀要 社会篇』第14号: 19-46
- , 1972,「日本出移民の時期区分について」『琉球大学法文学部紀要 社会篇』第16号: 119-146
- 海外興業株式会社編, 1937,『日本移民概史』海外興業株式会社
- 加藤恵津子, 2009,『「自分探し」の移民たち』彩流社
- 木原隆吉, 1935,『布哇日本人史』文成社（奥泉英三郎監修, 2004,『初期在北米日本人の記録 <布哇編> 第6冊』文生書院 所収）
- 経済地図社, 1956,『横浜市経済地図中區明細地図』昭和31年度版
- , 1956,『横浜市経済地図西區明細地図』昭和31年度版
- 満長彰, 1904,『今日の布哇』満長商店
- 日布時事社編, 1935,『官約日本移民布哇渡航五十年記念誌』日布時事社
- Okihiro, Michael M. and friend of a'ala, 2003, *a'ala: the*

story of a Japanese community in Hawaii. Japanese Cultural Center of Hawaii. Honolulu, Hawaii.

王堂, フランクリン・篠遠和子, 1985,『図説ハワイ日本人史1885-1924』ビショップ博物館

タサカ, ジャック・Y, 2002,「ハワイ日系100年史⑥ 先山

に隆盛を極めたホノルルの日本人旅館」『イースト・ウェスト・ジャーナル』2002年8月15日版

渡辺礼三編, 1987,『ハワイ報知創刊75周年記念誌』ハワイ報知社